

棚田を支える石積と 助はんどうの心意気

おおいだに 大井谷の棚田



島根県吉賀町大井谷地区は草分百姓村でした。草分とは土地を開拓してムラを作った人や家のことをいうように、大内氏に仕えていた三浦重經の一族が室町時代末期から戦国時代にかけて、この地に入って開拓したからだそうです。そのためか住人のほとんどが三浦姓でした。今に続く棚田も、その当時から営々と築かれてきたもので、特に江戸期には耕地面積が急激に広がっていきました。最大時には17ha、約1000枚以上の田んぼが耕作されていたと伝えられています。

石積みの棚田はどちらかといえば西日本に多く見られます。大井谷の棚田の石垣は、開墾した際に出た石を組み合わせる野積工法で築造されたものです。城郭の石垣のような精巧さには欠けますが、幾代にもわたって積み重ねてきた畝畔は農民の汗の結晶といえます。こうして室町期から約600年にわたって築かれた棚田は幾度となく積み直しや補修を経て、現在600枚の田んぼとして残っています。しかし、大井谷地区も他の中山間地と同様に過疎化が進んでおり、減反政策や農家の高齢化、後継者不足などで作付け面積は減少し、休耕地も目立つようになりました。

かつては津和野藩主への献上米とされたように、昔から美味しい米として有名でした。周辺の山々から湧き出る清冽な水と南向きに広がった日当たりのよい棚田、そして標高400～450mのこの地区は昼夜の温度差が大きく、美味しい米の条件を備えています。

近年、作付けは減りつつありますが、大井谷の人々は棚田まつりやオーナー制度によって棚田を守ろうとしています。かつて、ひどい干ばつで集落の水が枯れた時、人々は集落の最上部にある水受けにたまった水によって生き延びることができたため、それからは水受けの事を「助^{たすけ}はんどう」とよぶようになりました。住民による「助はんどうの会」はこの時の志を受け継いだもので、棚田をまもろうとしています。

■位置図



助（たすけ）はんどう
干ばつ時、大井谷の一番上になる岡屋敷におかれた直径1.2m、深さ30cmの石にだけ溜まる水のおかげで人々が生き延びたことから助はんどうと呼ばれるようになった。



田植え後の景観は棚田百選にふさわしい



棚田の里 大井谷川砂防公園



大井谷西斜面の実りの秋
作付け面積は減少したが、近年はオーナー制度の導入など、棚田の保存・活用への動きも活発になっている。